

歌集 荒 磯

作風叢書

第五篇

昭和四十一年九月二十日印刷
昭和四十一年九月二十五日発行

定 価 七〇〇円

著 者

庄 司 正 史

春日部市樋堀

発行者

大 野 誠 夫

印刷者

加 藤 護

発行所

桜 桃 書 林

浦和市岸町五一七―一四

振替東京二六〇七〇番

電話浦和(22)三六四六

序

本集の著者、庄司正史氏は、若くして北原白秋に師事し、「多磨」の人であつたが昭和二十一年「鶏苑」が創刊するや同人として参加、以来行を共にして現在に至っている。

潔癖なために世俗になじめないところもあるのだろうが、人柄は温厚篤実ということばがふさわしく、現職は春日部市の初代図書館長である。

歌風は多磨系の人らしく、感覚的に秀れ、また、かなり技巧家でもある。しかし、明色に満ちた師風に較べると、やや暗く、北方的で、写実主義のきびしい態度をつねに崩さず、全力をもって対象に迫ろうとしている風に見える。ただ、自己に余りに誠実であり過ぎるためか、作品の数が極

めて少い。寡作家なのである。数は少くとも、一冊が密度の重みに耐えた作品で埋まっているならば、それ以上のよろこびはないだろう。

足萎えのわれと歩むを厭ふ子に來りし齡^{よはひ}肯はむとす

夜の畳いま凍蟬がおちて來てここに一つの終末があり

可笑しくて独りわらへりわが汽車に沿ふ村の道牛が逃げ行く

雨漏れば大工を入れぬ二三日富めるがごとく飽屑見つ

おづおづと歩み來しとき夜の路地にたしかに繩の梯子揺れをり

あひ逢はぬ幾年^{いくとせ}が過ぎひび多き手を侮りていまは見えてゐき

春寒き洲^すに下りてゆく鶏の群汚れし脚の揃ふときあり

犬族に好かれぬわれは夜の路地のある家の裏必死にて過ぐ

その眼のみ軍鶏にして鈍き鶏路地に飼はれぬ暑き西日に

昭和二十八年から三十五年くらいまでの作品から抄出したが、内に沈鬱を秘めながら、発色は鮮麗で、響きはいずれも勁い。また、たとえば、著者の歌にある路地に飼われた闘鶏の恐しく静かな眼光に似たものを感じる。作品の底から発するこのさびしく、静かな光の実体は何だろう。

著者は、生れながらの足萎えであった。この病気は、著者の魂を食いやぶり、その代償として著者の文学を育てる役割をしたかもしれないが、著者の作品に流れる深い寂寥感を見逃してはなるまい。病気による魂の痛みの深さは、著者の作品の寂寥感の深さに比例するものだろう。ここにあるのは、埋めずめることのできないマイナスを背負った鬱屈した人生の抒情で

ある。

食^{じき}の時からだ打ちあふ朱と金の虹鱒にして激しきものを
夜遅く帰りし家に起きてゐし古妻と小^ちさき金魚幾匹

苛立ちて物探しゐし夜深^{よる}く母の写真に涙とまらず

命終のときにおもふは係りを持ちし女のこのみといふ

荒磯はただ白き波無名にて終らむわれもこの部^{むら}落^ちびとも

一月の五日の夜の銀座にて罵声を浴びぬ足萎えゆゑに

ゆゑよしは知らず街川に棲みつきて冬越す鷺のけさ光る羽

これらは昭和三十六年からの近作である。一つ一つの作品に対して、私

は解説めいた文章を綴ることを控えたい。私が何も書かなくとも、これらの作品は、実に多くのことを語っているようだ。自分の運命の悲しさに全身で耐えて五十歳を過ぎた著者が、こんど勇気をもって、ここに一家集を編み、世に問わんとしている。書名である「荒磯」の象徴するものは、絶えざる風浪に洗われた孤の境涯とっていいだろう。その孤独の座を自己の運命として観ずるところに、私は、人間として、作家としての庄司正史氏のいさぎよさを感じる。著者の思いは、戦後二十年の泥濘の歩みを共にしてきた私の心に通う。大方の清鑑を望むこと切なるものがある。昭和四十一年七月七日。 大野誠夫記。

目次

序 大野誠夫

瘤

△昭和二十八年—三十一年▽

嘘……………15

驟雨……………20

赤き崖……………23

終末……………25

妻の座……………28

雪山……………30

犬吠にて……………33

瘤……………36

紅茸……………38

櫓の火	42
ある街について	45
黒猫	48
嘔吐	50
三崎にて	53
黒き刻印	56
不逞	59
ふるさと	62
廃船	64

秩父夜祭	66
存在	存在
存在	存在
手	74
雪と貨車	76
海の鷄	80
花筵	82
びしよびしの旗	84
牛と仙人掌	87

存在 △昭和三十二年—三十五年▽

眼	音楽	意志	絵馬	園	岸壁	夏花	青杉	徒勞
115	111	109	106	103	100	97	93	89

海辺	壁	朝焼	北の墓 △昭和三十六年—四十二年▽	浮腫	家系	原色	伊豆にて	死に捧ぐ
146	143	139		134	131	122	120	118

金魚……………	178
血縁……………	176
虹鱒……………	173
ある街にて……………	170
病院日記……………	167
北の墓……………	161
旅をりをり……………	158
鳥獣……………	154
北国抄……………	149

金盞花……………	209
ある手記……………	204
苔と砂……………	200
荒磯……………	198
秋の虹……………	194
憤怒……………	191
冬の星……………	186
水芭蕉……………	182
煙草の花……………	180

雪の茜……………211

老詩人……………214

榛の芽……………217

後記……………219

装釘 芥藤 清

西曆一九六六年 作風叢書第五篇

歌集荒磯 収録作品四九七首

荒

磯

瘤

嘘

断つべき絆にあれば断つことをこの冬わ
れは為さねばならず

漸くに異質のものを持つひとにわが疲れ
たり寒き日つづく